ISSN 0913-0217　2026.6.1. 第1293号

発行人　北海道医師会長　松家　治道
編集人　情報広報部長　橋本　洋一

発行所　北海道医師会
〒060-8627 札幌市中央区大通西6丁目
TEL (011)231-1432　FAX(011)221-5070
URL http://www.hokkaido.med.or.jp/
E-mail info@office.hokkaido.med.or.jp　頒価 1部 275円(税込)

風季節

ご無沙汰致しております。S先生とお会いして40年余りの歳月が流れました。仕事第一主義の先生が、定年を迎えられ、仕事以外のことに着手する余裕が生まれ、差し上げた私の拙著『父母の帰郷』を思い出して、読後感を寄せていただいたことに感謝申し上げます。

『父母の帰郷』は私にとって2冊目のエッセイです。先生に指摘していただいたとおり、札幌オリンピックの歌である『虹と雪のバラード』を『雪と虹のバラード』と間違い、作詞者であり、かつて札幌彫刻美術館（現・本郷新記念札幌彫刻美術館）の理事長をされていた河邨文一郎先生に怒られそうです。河邨先生には、彫刻美術館での小旅行やある研究会で講師を引き受けていただいたこともあり大変お世話になりました。

先生のご指摘どおり、アルコールにまつわる話が多いと読んでいただいた方々からよく言われますが、あまり自慢のできる話ではなく、反省している次第です。

本の題名の『父母の帰郷』はもともとは『両親の帰郷』という題でしたが、日本を代表する純文学作家であり、友人でもある小檜山博先生から『父母の帰郷』に変更したほうがいいと助言をいただき、『父母の帰郷』に落ち着きました。このエッセイは肺がんで亡くなる寸前の父の希望どおり、母の骨壺と一緒に北海道に持ち帰る場面を思い出して書いたものですが、鹿児島で闘病生活を送っていた父親の見舞いに遠方故に月に1回程度しか足を運べなかったことが悔やまれます。当初、北海道に父母の骨を持ち帰ることに反対であった祖母も最後には父の遺言を聞き入れてくれました。札幌西岡に屋内型のお墓を建て、そこに父母は眠っております。

『父母の帰郷』
―S先生からの手紙に対する返信―

情報広報部長　橋本（はしもと）　洋一（よういち）

そもそも『父母の帰郷』は小檜山先生のご尽力なしでは、刊行にこぎつけることはできなかったものでした。あまりにも私がのんびりしていて、ぐうたらな私の尻を叩いていただいたおかげで、現在、『父母の帰郷』というエッセイが存在していると言っても過言ではありません。そういう意味でも小檜山先生にはいくら感謝しても感謝できるものではないと今でも思っております。現在ほど活字離れが進んでいない時代でありましたが、地方紙の中で最も発行部数が多い北海道新聞から刊行されることは夢にも思っていないことでした。

話が変わりますが、平成元年に市の病院誘致計画に乗って、開設にこぎ着けることができましたのも、まさに青天の霹靂（へきれき）とも言えることでした。病院開設時、80名だった職員が現在では約5倍の４２０名に増え、ロッカー室もパンク寸前の状態で新病院の設置が求められるところですが、資材を含む建築コストの高騰のため、今後の展開をどうするべきか悩んでいるところです。

昨年10月に大学時代、仲が良かったO先生が急逝され、小児脳腫瘍の権威であったM先生も5年余りの闘病生活を送られた末に、3月にお亡くなりになり、ご自宅にお伺いし線香を上げさせていただきました。同世代の方々の死は特につらいですね。

A教授（当時）の勧めもあって、M先生や北大総長として活躍されているH先生をはじめとした著名な先生方に頸髄専門外来等で大変お世話になりました。病院開設後に増築した理事長室にT名誉教授が訪ねてきていただきました。

残された時間は年々短くなっていきますが、先生からいただいた手紙を読みながら悔いのない人生を全うしたいと心から願う次第です。ご自愛ください。